

それから、村人は源五郎の命日になると、荒木神社跡から火の玉が出て、ゆらゆら飛び交うのを見たのであった。

荒木神社の境内には源五郎が信仰する別司の神社もあった。焼け落ちるとき、この堂守は、神体を背負って逃げたが、乙坂今北で力尽きてしまい、道の傍らのお堂に預けると討ち死にしてしまった。

「このご神体は、別司に帰りたくて、別司の方を向いてしまわれるとか。そして、

「荒木には仲間の仏様がいっぱい土の中に埋まれています。早く掘り起こして、お堂をたてて祭ってあげてください。」

と、おっしゃるのだ。



58 乳母の懐

建武四年（一三三七年）、樺坂の山のてっぺんに城ができたんやと。村の人は高城（三峰城のこと）って呼んでいた。その頃は、天皇さんが南の朝廷と北の朝廷と二人も現れなはってな、国中が二つに分かれて戦争してたんや。南北朝時代って言うてるの、この越前の国もあっちこっち戰場になつてた大変な時代や。

さて、この高城は南朝方の城やった。山をかけおりては何べんも勇ましく戦った。けど、四年目にこの河和田の谷にも敵が大勢やって来ての、一気に山にせめのぼって、城を落としてしまった。

大いちょうのある三峰村に住んでいた大将の若君は、城がおちたとき、おんば（乳母）の懐にだかれて、お供の人と山伝いに南へ逃げた。別司の山まで来ると、



谷でもないのに岩の上をきれいな水が流れていて、その横には人が入れる岩穴があった。三峰の村とそっくり、南の方が開けていて、三方を北風から守ってくれるいい場所やったんで、かくれ住むことになった。

それからここを『おんばのふところ』と呼ぶようになった。

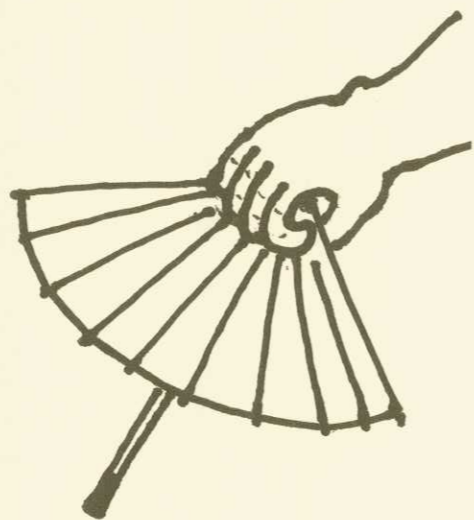
しばらくおんばのふところに住んだけど、ここは南の方が味真野まで見える見はらしのいいところじゃ。

敵に見つかりやすいんで、もっと東の方のくぼんだ谷に移ったんやと。

そして、お供の中に刀を作る者がいたもんで、みんなでかまやくわを作って、だんだんに村の人と仲良うなって、山を下りたんやと。

かじやをしたところは「かんじや清水」って言うてちよつと平とうなつて、今でも谷水がちよろちよろ湧いているんや。

59 狩原の大入道



「おい、狩原ってどこか知ってるか。」

「別司から赤坂へぬける山とこやろ。」

「ほや、おととい、あそいでおっとうし目におうたぞ。」

「大入道か。」

「うん、赤坂のばあさんを見舞に行ったら帰りが晩になってしもた。その時出よったんや。うしろからな、から傘のてっぺんつかまれて、べつにもいっつもならん。ふりむいて目でもおつてみいな、なにされるやわからん。雨ん中迷たわ。わやくさや。あそこは一人で通るもんやないぞ。」

「いつも来てる郵便のあんちゃんも、こないだおうたんやと。」

「本当か。」

「ほや。急ぎの用で、晩方小坂のお寺に手紙とどけに来たんやな。ほしたら出たそつや。相手が若いもんやさけ、大入道め『すもつ取ろつ』。『つていつたんやと』。」